

硫黄鳥島の奄美群島との近接性と歴史・生活痕跡

長嶋俊介

鹿児島大学多島圏研究センター

A Research on the Historical and Livelihood Distance Between Iou-torishima Island and Amami Nesia (Group Islands)

NAGASHIMA Shunsuke

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨：硫黄鳥島は沖縄県に所属し琉球王国の貿易を支えた。現在は無人島だが、奄美群島特に徳之島との近接性は、さほど研究の対象になっていなかった。他でその歴史の全体性を扱ったので、ここに焦点を合わせた。また生活痕跡を生活環境要素の総合性を意識して、フィールド調査成果をまとめた。

Abstract: Iou-torishima (“iou” meaning sulphur and “tori” meaning bird) is currently an uninhabited island that used to mine sulphur. The sulphur trade supported the Rykyu Kingdom, this is th main reason for their keeping territory, and still now belonging to the Okinawa Prefecture. So far, not many researches have looked at its relationship with the Amami Archipelago despite its proximity, especially to the Tokunoeshima Island. We take the opportunity here to put focus on this as the history was taken into account else where. This paper summarizes the field research conducted on the life traces of island life prior to migration with reference to the comprehensive five human environmental elements; livelihood ware.

1 硫黄鳥島のフィールド調査とそれを補う調査

硫黄鳥島は周知の通り、沖縄県に所属する。かつては独立した村で、現在は那覇に属する泊に直属していた。しかし現在は、1000kmも離れた久米島に属する。彼らの移住先である、久米島鳥島集落を訪ねただけでも、その経緯は解明しにくい。文献考察と歴史追跡が必要である。沖縄所属は、実に薩琉400年史を紐解くばかりか、南宋時代からの中国国策としての火薬原料国家管理にまで遡ってこそ解明できる深い歴史がある。琉球王国は、この硫黄で貿易立国が成り立っていた。これは意外にも沖縄側でもさほど知られていない。辺境が国(琉球)を支え、境界が薩(ヤマト)琉(琉球)の明との微妙な関係を作り、奄美の植民地的経営が、明治維新の原資を形成し、そのネットワークが開国前の最新外交情報源として(主として薩摩・島津が握り)機能した。それらを思うとき、硫黄鳥島は日本史の中に正当に位置づけられるべき地政学的島嶼であるに関わらず、忘却の底に置かれた「辺境島」「単なる廃村扱い」となっている。奄美とは(特に徳之島とは)65kmしか離れていない。その意味でも、今回調査は鹿児島側から行った調査としても、画期的意義がある。沖縄側からも二日連続は希である。既往調査や、既

存文献、その社会史については、これら実査も踏まえ、以下の長嶋論文で紹介しているので、ここではそれ以外の部分について扱う。

- 1 長嶋俊介「『火の道』生活の島々」（長嶋俊介・福澄孝博・木下紀正・升屋正人）『日本一長い村 トカラ～輝ける海道の島々～』梓書院, pp.25-38, 2009.7.22
- 2 長嶋俊介「硫黄島島の地政学・生活学－生活痕跡と社会史研究の意義－」『日本島嶼学会久米島大会研究発表要旨集』 pp.37-40, 2009.10.2
- 3 長嶋俊介「硫黄島島（沖縄）の地政と生活痕跡 ～公共民の経営学・現場学43～」『会計検査資料』第529号, pp.41-47, 2009.10
- 4 長嶋俊介「琉球王府硫黄島島経営とその後～公共民の経営学・現場学44～」『会計検査資料』第530号, pp.48-53, 2009.11
- 5 長嶋俊介「島島集落の経営と移住・移民～公共民の経営学・現場学45～」『会計検査資料』第531号, pp.53-59, 2009.12
- 6 長嶋俊介「離島と国境： 行政概史と経営戦略」『国境：いかにこの呪縛を解くか』北海道大学出版会 pp.35-64, 2010.1
- 7 長嶋俊介「硫黄島島の地政学と無人島化研究の意義－避難・移住・移民顛末と移住後生活誌の総括－」『島嶼研究』第10号, pp.29-54, 2010.7
- 8 長嶋俊介「島嶼と境界—日本国境形成史試論—」『国際政治』162, 印刷中

2 奄美群島と硫黄島島

日常生活圏としての距離

硫黄島島は、多年にわたり琉球王国直轄経営地として、食糧・工具・生活資材の供給を受けてきた。統治主体は、那覇・泊にあり、船は運天・伊江島等を経由して、食糧などを積み込んできたので、言語文化圏的には後者との関わり合いを持つ。

地理的な近さから、硫黄島島は徳之島からも見える。伊仙町小島集落には「島島断層」がある。2010年1月現地調査に入ったが、硫黄島島噴火灰の層は、保存状態が良くない。行政・博物館関係者もそれを課題としてあげていた。関連写真を掲記しておく。硫黄島島火山層は、黒色の腐植土。2度にわたる。畑総工事現場で2002年2月に発見された。



写真1. 小島鍾乳洞でも断層が確認できる



写真2. 発見当時の写真：徳之島町郷土資料館



写真3. 徳之島北西から硫黄島この間65km

奄美群島と関わるのは水と薪の確保、そして漁獲物の販売であった。琉球王府と薩摩藩支配の間で明確な境界があった。沖縄県と鹿児島県になっても、その境界は固定化されており、噴火避難先が徳之島になることはまれであった。米軍統治で奄美と沖縄の境が解除されると、この距離問題は一気に変化する。奄美側の教官が硫黄島の教官となる。また硫黄生産が減ると石臼（豆腐用）が主たる産物となり、徳之島経由での販売路が形成されるようになる。日用品購入や干物販売は、この自然距離経路での流通の本来さを物語るようになる。

硫黄島開発と距離

硫黄島射爆場問題が発生すると、奄美漁民は漁場確保に立ち上がり、東京まででかけ、のぼりを立てての抗議活動を展開した。また1972年沖縄復帰後その温泉地・リゾート観光地としての開発に、徳之島側の業者が手を挙げて取り組もうとしたが、久米島鳥島集落側の強い反対で実現しなかった。

2 生活痕跡

総体としてかつ写真でとらえることと方法

生活環境 = Human Life と Environment の相互作用を、総括的に Hard ware (モノ・カネ・経済・インフラ等)、Soft Ware (制度・仕組み等)、Human Ware (人間関係・血縁・コミュニティ等)、Spiritual Ware (文化・宗教・価値観など)、Ecological ware (生態系・気候・火山・海陸地の利用) などを組み入れることで、生活の全体性を表現できる。

無人島化した社会は、それを切り出した「歴史時間」においてくれる。その後の人々が限られるからである。写真で記録することは、その歴史編年の風化を、留め置いてくれることにもなる。また断片から垣間見られる歴史の実相理解も貴重である。

多様性と近い過去

日常生活・産業痕跡・現在の課題痕跡が随所に見られた。拌み場所、食器、学校跡地、集落跡地、荷揚げ施設、船着き場2箇所、鉸山・鉸石処理施設・運搬施設、農場跡地、特異な水飲み場等である。一定の基準ですべて、持ち出したが、それでも残ったものがある。鳥島に神社等まで移していても信仰の対象になっている。

石臼は今も久米島と徳之島に残っており、両島博物館でも展示されている。最近の痕跡としては、米軍統治痕跡、中国人上陸をしめすポリマー製罫、土地所有権主張と争議を象徴する碑も見られた。また山羊の放置が環境被害（専門家の調査に待ちたい）及

び植生繁茂の抑制として機能していた。

以下その一部を紙面の都合上、抜粋して掲載する。各種過去資料と対比することで往事の繁栄と生活文化・技術・手段・インフラなどを追跡できるのみならず、孤島・噴火島・鉾山島事情による生活苦とその改善も生活誌・生活史・社会史的に追跡可能となる。

港湾に荷揚げ施設インフラ



写真4. 東側荷揚げ施設



写真5. 東側策道けん引施設



写真6. 西側荷揚げ施設



写真7. 同施設の位置



写真8. 同施設内エンジン付き駆動車



写真9. 東海岸堤防



写真10. 東海岸側歩道（玉石を並べている）

生産活動痕跡



写真11. 硫黄生産施設跡：素朴な施設



写真12. トロッコの車輪と鉄路が残っていた



写真13. 鉄路が持ち去られていない



写真14. 米軍統治時代痕跡：すべてアルファベット

火山と信仰



写真15. 硫黄山を見下ろす位置の拝所：琉球文化をみる



写真16. 銅銭は緑青を吹いていた



写真17. 別の硫黄炎吹き出し口にも拝所



写真18. 新しいが琉球式で境界史が見える

生活Wareと生活技術

集落生活を象徴するのが蘇鉄。子供が生まれると植えて飢饉に備えた。飢饉は江戸時代には頻繁に発生した。特に水不足はひどかったので、独自の漆喰を岩盤に塗り、石風呂のような貯水施設を作った。各家蓋をして管理し、犬の糞で水を汚さないように飼育制限もした。それら痕跡も随所にかつ異様に見えるほど多い。



写真19. 蘇鉄は集落・屋敷の所在地を示す



写真20. 貯水施設と荷揚げ施設（遠望）



写真21. 持ち帰らなかった什器類は多い。避難的引き挙げを彷彿させる。



写真22. ビール瓶はその刻字で時代が分かる



写真23. 硫黄工場近くの石垣：事務所と寮があったと推測されるその近くの水槽はミニプールのように大きかった。集落のものとは生活期基盤に違いを顕著に示すものであった。

土地に関する権利

無人島になり利用されなくなって久しい。土地をめぐる権利関係がまだこの地にも残されていた。リゾート開発阻止と権利紛争も歴史に刻まれている。国土利用・境界島保全という面でも、熟慮・再考が求められる事案でもある。



写真24. 入会組合の標識



写真25. 新しい入会組合の石碑だが台風禍か強風かで倒れていた

国境島外国人踏破痕跡



写真26. 中国製風呂が東登り口先にあった
明らかに不法入島の痕跡である。

環境問題

人間の生活・産業空間が火山活動と重なり、生態系を変化させてきた。山羊の存在もあり、まだ元の生態系には戻りえていない。



写真27. この島には深い森はない



写真28. 山羊が群れをなしてけ
もの道を歩いている